

デッドライン

2005(平成17)年11月20日鑑賞(ユウラク座)



監督=タニット・チッタヌクン/出演=チャッチャイ・ブレンパーニット/アムポー・ラムプーン (ハピネット・ピクチャーズ配給/2004年タイ映画/94分)

……日本では珍しい、「ムエタイ」とは無関係の、シリアスでダイナミックなタイ映画。「タイ版インファナル・アフェア」との謳い文句には違和感があるが、1997年に現実におこった通貨危機、そしてその時、融資を受けたIMF（国際通貨基金）への返済をめぐる国内の対立という時代背景は興味深い。こういう映画から、銃撃戦の楽しさ(?)だけでなく、経済・金融政策のあり方も勉強しなければ……。

タイと私

1990年代の計5回の韓国旅行、2000年8月以降10回近くに及ぶ中国旅行を体験してきた私だが、タイへの旅行は2002年4月から5月にかけての1度だけ。

私と同年代の商社マンで、タイとの取引に何十年も関わってきた人のコネによる旅行だったから、その旅行は観光つき、食事つき、夜のお遊びコースつき、○○つき、△△つきなど至れり尽くせりの大名旅行!

観光は到着日翌朝のバンコク市内の王宮観光のみで、後は豪華な夕食とカラオケの連続。そして翌日からはバタヤーにあるデッカイ別荘地にくり出して、まさに酒池肉林の世界……? 食事、買い物、○○、△△で疲れ果て、数kg増えた体重で日本に帰ったことをよく覚えている。これ以外の旅行は、すべてガイド本片手の勉強旅行だが、このタイ旅行だけは唯一の例外。

今回のタイ旅行はツアー旅行とし、つましやか、かつ勉強になるものにしなれば……?

IMF 借り入れ問題と不良債権処理問題

この映画は、1997年に現実に発生した通貨危機によって、タイ政府がIMF（国際通貨基金）から借り入れた5800億バツの返済問題をテーマとしたものだが、タイの経済がそこまで悪化し金融機関を含む多くの企業の倒産が相次いだことによって生まれたのが、政治不安と政権闘争。タイのタクシン政権という名前はよく聞いていたが、その前はチュアン政権さらにその前はチャワリット政権とのこと……。

日本では、2005年11月の今、株価は1万4千円を超え、やっと一時の経済不況を脱した感があるが、それを可能にしたのは何とんでも不良債権処理の進展。

2001年4月の小泉政権発足当初の焦眉の課題は不良債権の処理だったが、その早期処理を訴えた小泉＝竹中ラインに対する「抵抗勢力」の抵抗は相当なものだった。

日本ではその対立をめぐって、この映画のような物騒なことは起こらなかったが、タイでIMFからの借入金の返済をめぐって展開されるこの映画の物語は、ホンモノそれともつくりもの……？

政府側と反乱側の構成は……？

日本では戦後60年の間、この映画のような国家レベルでの軍を巻き込んだ抗争を体験していないから、この映画を観るについてまずは政府側と反乱側の「構成」をきちんと押さえておく必要がある。政府側は、IMFへの返済を2年以内に行うと公約したタクシン政権中枢部。これに対して、国営企業の売却など相当な無理をしてそんな返済を強行すれば、タイに再び経済的混乱が発生すると主張するのは、反タクシン連合を組んでいるさまざまな不平分子。いわば、2001年4月に始まった小泉改革に反対する野中広務、亀井静香のような「抵抗勢力」の面々だが、日本と異なるのはそこに軍人がたくさん入っていること。

この映画で、反乱側に属することになる主人公ナウィン（アムポーン・ラムプーン）は、もともと特殊部隊に属していた国家に対して忠実な兵士だったが、国境付近での銃撃戦のさなかに国家に裏切られることになったため、反乱側に……。

そんなこんなの、反乱側のさまざまな人物像の観察も面白い……？

「タイ版インファナル・アフェア」はちょっと……？

この映画の主人公は、上述したナウィンと反乱側鎮圧にあたるパコン警察少佐（チャッチャイ・ブレンパーニット）の2人で、女性の登場はゼロ。戦争映画やアクション映画には時々そういうものがあるが、この映画ほど徹底して女優が1人も登場しないのも珍しい。まあ、たまにはこんな映画も……。

そんな男性映画だからか、この映画の宣伝文句は「タイ版インファナル・アフェア」というもの。しかし、これにはかなり違和感が……？

『インファナル・アフェア』3部作が人気を博したのは、男性中心のアクションものという面もあるが、何といても警察とマフィアに潜入した2人の主人公を中心として練りに練られた面白いストーリーによるもの。それに対して、この『デッドライン』は、「反乱」の動機に面白い背景はあるものの、ストーリー自体は単純なもの。したがって、「タイ版インファナル・アフェア」はちょっと言い過ぎでは……？

火薬の量と市街戦が売りモノだが……？

タイ映画では「オカマ」と「ムエタイ」が有名だが、「どっこいそればかりではないぞ。タイもアクション映画の宝庫だぞ」というのがこの映画の主張。またこの映画最大の「売り」は、ビル爆破に使われる火薬の量と、市民を巻き込んだパトムワン交差点（日本でいえば、渋谷のスクランブル交差点に相当するとのこと）での激しい銃撃戦。この映画が描くのは政府側と反乱側との対決だが、IMFへの借入金返済の実行とタクシン政権の継続は歴史的事実だから、どちらが勝ちどちらが負けたのかは明らか……。その結果、敗者となったナウィンたちはどんな姿に……？

また、戦う者同士の対決はそれなりに筋が通っておりカッコ良さもあるのだが、一般市民を巻き込んだ銃撃戦が中心市街地でこのように堂々と展開されることについては、政府側そして反乱側への対応を指揮したパコン警察少佐にも、大きな問題があるのでは……？

■ やっぱ『マッハ!』の方が……?

最近では日本でもアジア映画の紹介が広がり、インド映画やパキスタン映画などと並んでタイ映画が上映されることも多くなった。つい最近観たタイ映画の『風の前奏曲』(04年)も良かったが、何ととってもタイ映画で面白かったのは『マッハ!』(03年)(『シネマルーム6』194頁参照)。これは、日本映画に時代劇があり、ハリウッド映画に西部劇があるのと同じようなもの……?

近々、『マッハ!』を超えるアクション巨編と評判の『七人のマッハ!!!!』が日本でも公開されるはずだから、それも楽しみに観なくてはと考えている。

『デッドライン』は、IMFへの返済をめぐる国内での対立という重大な政治、経済問題を背景としているから面白いものの、銃撃戦やアクションだけでハリウッドや中国、香港、韓国そして日本映画に対抗していこうとすれば、タイ映画はかなり苦しいのでは……? したがって、それよりも『マッハ!』級のムエタイ映画を売り出した方が、タイ映画には向いていると私は思うのだが……?

2005(平成17)年11月21日記

ミニコラム

タクシン首相、遂に退陣!

偽メール事件を受けて3月31日前原誠司民主党代表が辞任し、「瓢箪から駒」のように小沢一郎代表が登場した日本では今、小泉VS小沢の「ガチンコ対決」が注目されている。

他方タイでは、4月4日タクシン首相が退陣を表明した。彼がタイ愛国党を創設して政権を獲得したのは、小泉総理と同じ01年。小泉総理は郵政民営化に争点を絞って昨年の9・11総選挙

で大勝したが、一族の株取引疑惑の中、タクシンが下院を解散したのは今年2月24日。4月2日の投票日に一度は勝利宣言をしたが、野党と反タクシン派市民グループの批判は収まらず、遂に退陣を表明。政局は今混乱の真っ只中に。『シネマルーム』ファンがタイ映画を楽しむについては、こんな政治情勢のお勉強も……。

2006(平成18)年4月20日記